畫圖西遊譚
壹

楊百翰大學圖書館藏

西遊旅談叙

司馬君恩之揆之性尤工圖畫生嘗西
遊瓊浦觀紅毛所畫之猶畫耳而甚妙
因乞揆之君果恩因撮小冊以呈未逞履
匈之未得而得讀之於是恩揆未能鋪觀也ふの

友人絵而輯之名曰西遊旅譚乃将以木問叙余
覧之蓋自山川草木魚獸以至於篤宮室什
之異無所不圖隆景不壇勇遙陸老之境
無所不覩嗚乎雅雖雅哉此策也所圖畫之雅非
僅猶之雅雅而暢者之之雅也其書足之矣哉未之

是也仁夫足許詢之未嘗親之乎畧不能傳

而見之般若蛇曜照燦如徒之妙足奪猿之度

喜隨縁之未必能傳其而患之陷通敍述所備

如此之深真深生固於木嗜榮盡長文之難

也然慕其志不安小集日孫碗工其某人緒事之居

以往佳之游遍于海内名嶽其神妙處寫也曰

之而為不啻於之之所為難也果甚可歸江澤

與余善

寛政甲寅夏五月

赤穂　神吉東郭撰

西遊旅譚序

余嘗遊於伊豆浴乎熱海而登于日金山山上有小山曰圓山前抱天城之峻後負函關之巖右富嶽之巔〻左巨島之圜〻俯察衆山之峛崺周覽羣嶼之崒屼立觀十邦坐辨八極實東海之絶勝也而天下之奇觀也乃探篋裝操筆硯將畧圖真形以示於同好及臨紙醮

筆若存若亡無由下毫於是繹筆喟然嘆曰吁嗟聞之古者善畫有舍筆松豈不信然哉頃間友生江漢司馬氏齋其所著西遊旅譚諗余題其篇端開卷閱之則遊乎西邦之記也其所經過名都樂國神宇梵屋靡不采覽異言殊辭童謠歌謳靡不畢載間之以圖畫以便其觀覽因試案其日金山圖崎嶇嵳峩堂

泱鬱紆髣髴若視其處恍惚若在其所復亦嘆曰寫真之妙一至於斯乎余雖未西遊也覽其所已觀而信其所未遊昔者有為齊王畫者王問曰畫孰最難最易曰犬馬最難鬼魅最易犬馬旦暮在人之前不可類之故難鬼魅無形無形者不見故易司馬氏是舉也演風俗之美惡圖地形之險易皆考實按形之

事也豈特犬馬之難哉若夫使斯文遭輶軒之使以為奏籍亦必為洽見之奇書不刋之碩記也曰以是為序云

寛政甲寅五月戊申

福山　太田方撰

西遊旅譚巻之一

天明戊申の四月廿三日芝門を發して神奈川の驛小川や青木町より右の方山に登る熊野権現の宮又飯綱の社より夫より田畑をゆきて一本松とて小高き所あり是よりかし臨バ南蒼海をのぞむ海中に洲あり乃天女の社あり其向ふハ野毛本目十二天の森なるべし東の方筑波山西の方富山嶽に對すさも甚の絶景なり

小田原乃辺より左の方に入豆州熱海へ七里みち

山中ハいつれも左の方ハ海也大島初島見えて景色佳し此山中大石多石を切出ス（土肥又真鶴石ト云）近年伊豆御影石と云も出る所也三里餘土肥村に至（田夫ノ家ニテ酒食ヲ商）是れを過て熱海に至る本陣今井半太夫方也園中より温泉涌出する事昼夜六度甚熱湯にして塩氣あり此一村總て温泉あまた海中にもつき出る所あり夫より七八町東の方山路をのぼりて伊豆権現の社あり般若院と云其山下の渚邊に飛泉あり稀なる純湯也病を治る効験ある事多し俗云鉄氣ありて寒冷なりと俗是を称して権現の湯と云

神奈川ヨリ南海ヲ望ム
野毛
洲间弁天
本目
熱海之圖

日金山より熱海より登る事五十町頂に地蔵堂丈六の銅佛あり僧房三軒あて肉食妻帯す俗人の居所なし諸方深山にして田畑なく作只蕨小笹を生じて樹なし鹿猿狼多し夫より又登る事五町丸山あり其山径狭く一人を通ずべし然ども絶頂なる四方を臨めば絶景なり

伊豆國加茂郡日金頂所ニ眺望者十國五島自子至卯ニ相模國武蔵国安房國上總國自辰至申ニ其國所隷之南五箇島及遠江國自酉至亥駿河国信濃國甲斐國

實に眺望四維に達しもろもろの筆景あり畫意に
詠まれりといふとも經營甚かりし
温泉より西南の方來乃社あり大貴已命を祠る
總て此邊大楠あり十五圍の樹をみる
熱海より三島道還の方へ越るに五里許り山中にして
人家なし二里ばかり登峠の地にありける堂宇肉食
妻帯其茅屋に老婆一人住める白髪を乱し火を焚て居
り傍に見ず真に寥々然として人語の響なき深山
幽谷也事問人もなければ夫より山を下りて軽井沢といふ

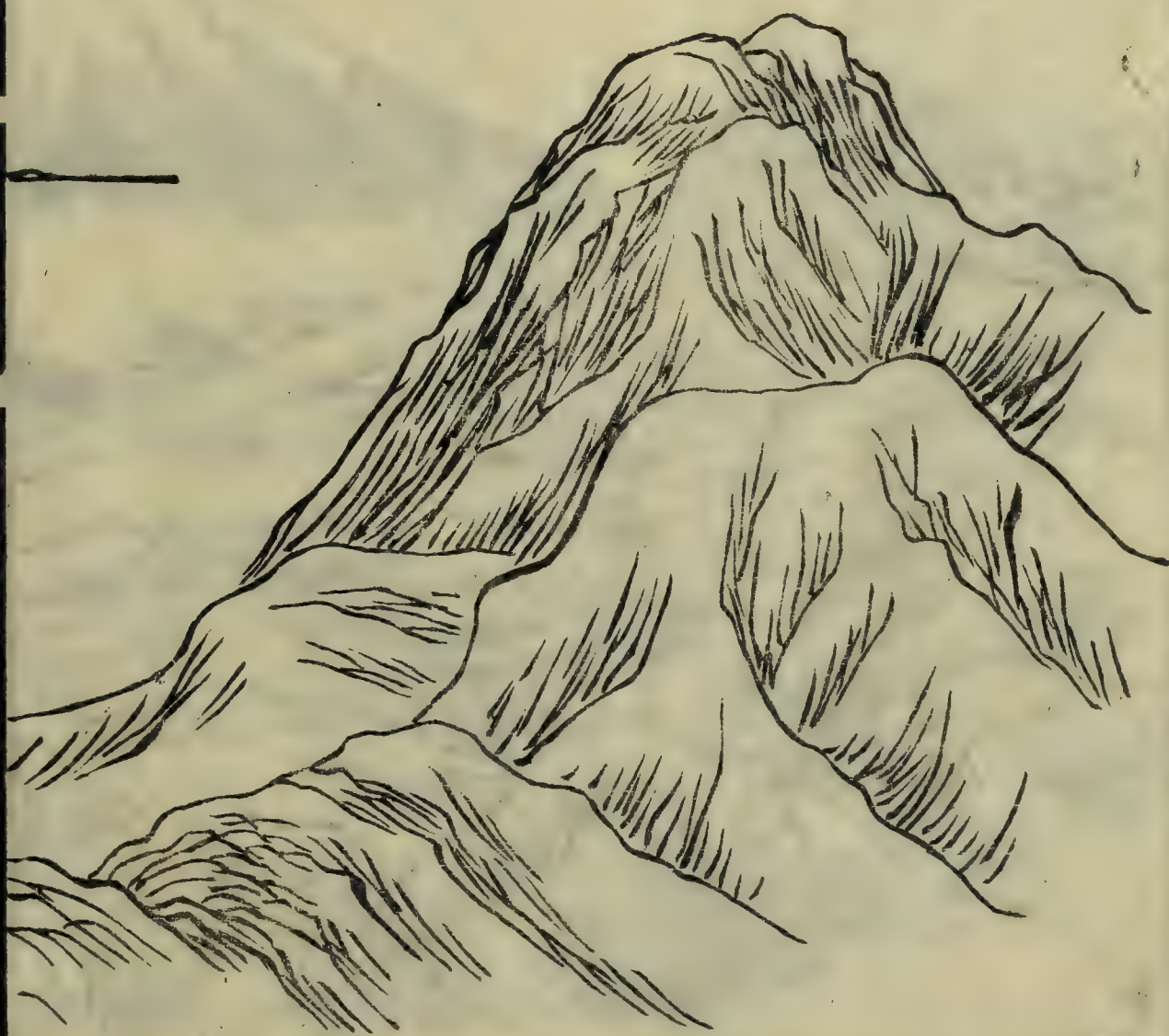
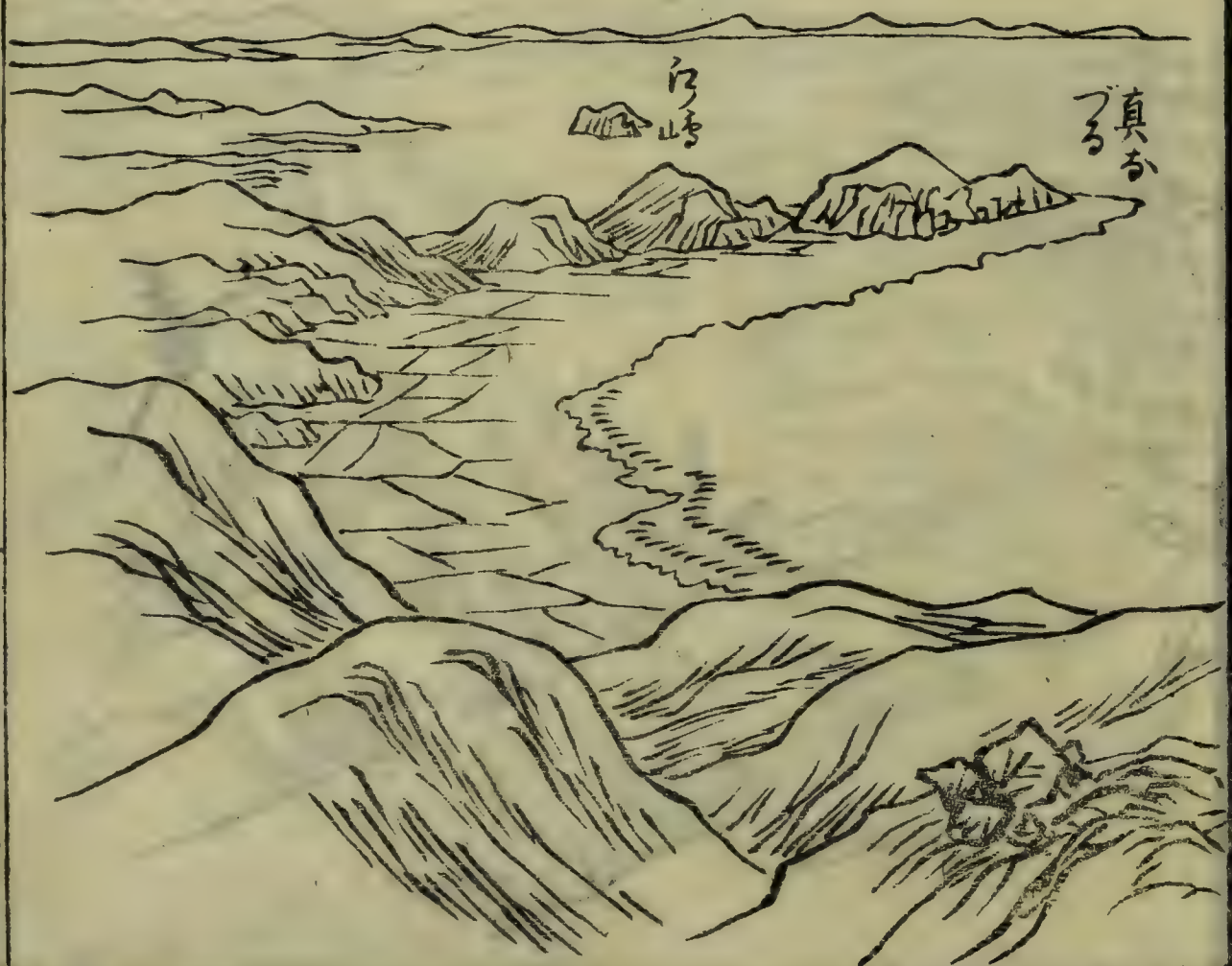
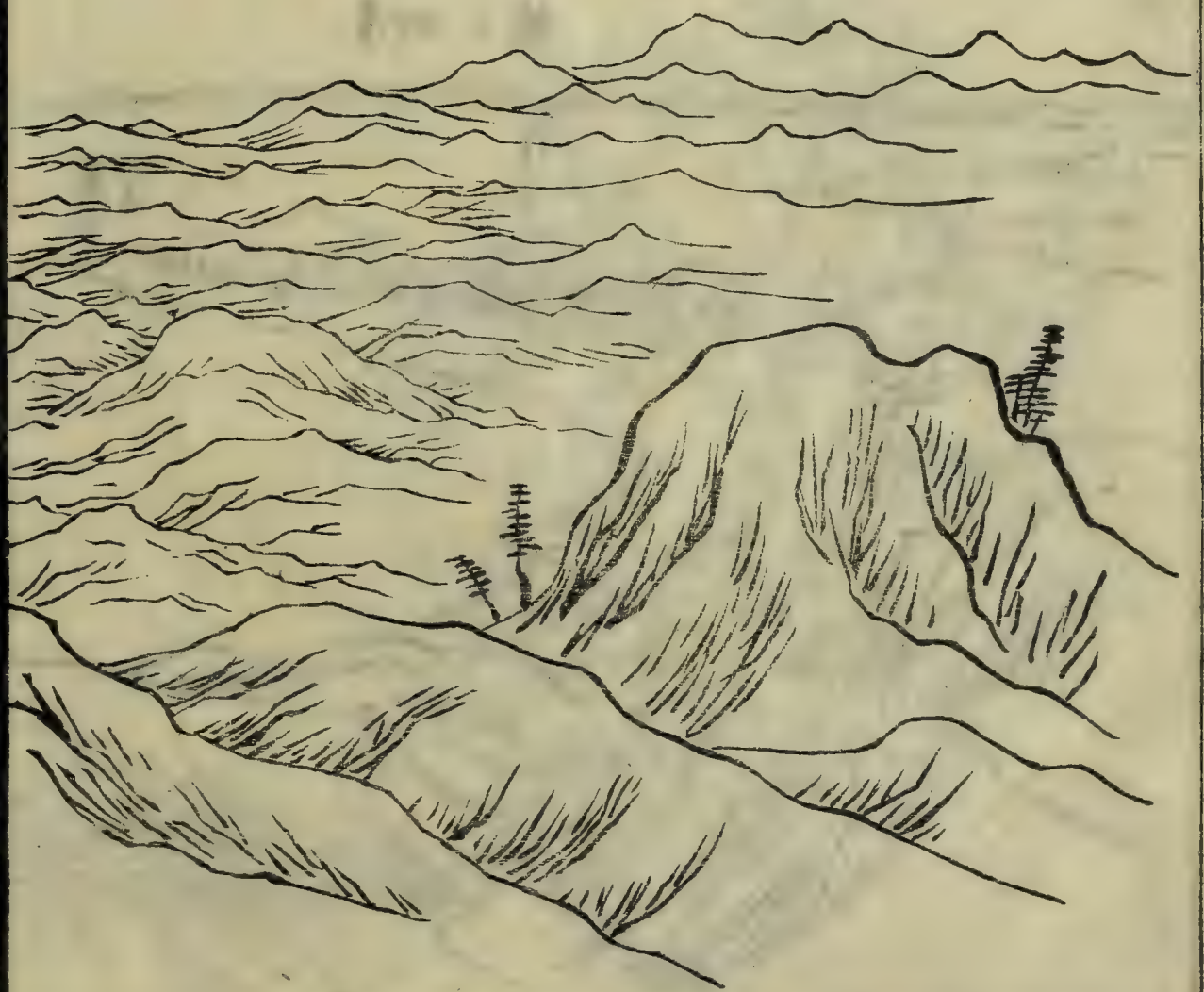
所なる纔(ハジカ)に人家(ジンカ)有又ビンノ澤(サハ)平井邑杯(コヽ)もあり
三島宿へ出る此山中ニ天麻(テンマ)天南星(セウ)花多し
五里の山路(ヤマヂ)茅(カヤ)生じて大木なし東ハ箱根山足高山なと
伊豆天城(アマギ)山 五里 十四里人家なし大木多し熊住 つらつら佳景(カケイ)(ヨキケシキ)なり

熱海より日金地蔵堂
までのぼる事五十町程
サイノ河原といふ所より
仰て冨士山を望む時に
五月七日 絶頂積雪如銀

六角北堂ハ地蔵丈六の
生像にして銅佛なり
うしろの茅屋ハ僧舎
なり

日金山頂ハ丸山より南乃方を望
右ハ熱海網代下田海上
大島新島三宅島見ゆる

日金山頂より
北の方をのぞむ
冨士山左ハ足高
山右ハ二子山

日金山頂より
東の方を望

房州上總
白崎
真なづる

日金山頂より西の方を望
箱根山三島沼津狩野川
富士川見ユル

三穂

江尻の駅より一里餘右の方山中に庵原といふ庵原河流るゝは来て出る其河源をたづぬれば北瀧と名づく飛泉あり岩石を廻りて流るゝ澗は甚の山林にして人物皆太布を着（太布ハ科ノ木ノ皮ヲ以テ製ス）此一村紙を製して産業とす

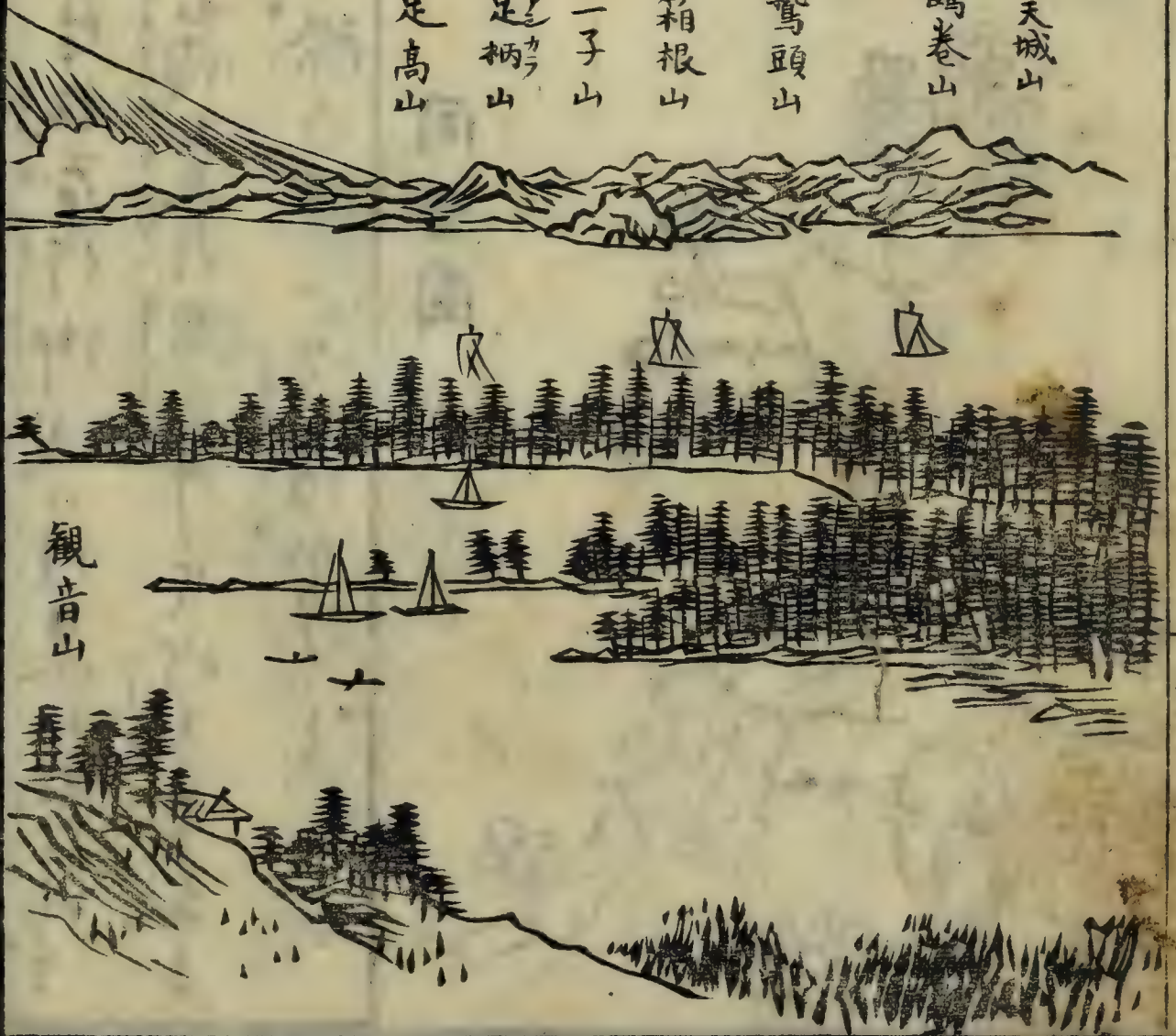
庵原深山の婦女

駿府町数九十六町有皆板屋作御城ハ往来の右にあり
四面山繞て氣候不順夏月忽変じて冷氣まとふる
土俗曰富士山より冷際乃風を吹落故なりと

覇王樹花

花の色カバ黄

同全圖

久能寺観音山ヨリ
冨嶽ヲ望圖
伊豆天城山
鶴巻山
鷲頭山
箱根山
二子山
足柄山
足高山
観音山

昔雪舟遊于支那而所
圖富嶽景何乎望無知
者余登於駿陽矢部補
陀洛山上始観之
寛政己酉春三月三日
寫於平安客館乃入
天覧
薩埵山
清見寺山
清水町
湊

八部龍華寺より園中に大なる鐵覇王樹甚大樹なし其頃花を咲ける事ありしと久能寺に（久能山ニアラズ別ナリ江尻海テ）石階をのぼりて觀音堂あり眺望する所眼下に清水湊人家千餘軒より清水川流出て蒼海中三穂の松原面に冨士を望む九難坂薩埵峠由井沖津江尻清見寺山右に足高山足柄山箱根山二子山伊豆鶴巻山鷲頭山天城山見えて日本第一の風景なりと

遠州掛川の驛より秋葉山に行二里山路をこへて川を渡又ゆく事二里川を越て森宿に（冨高下リ茶師多シ）夫より行事三里

一瀬(イチノセ)ともいふ此川を越る事四十八瀬なり是より麓(フモト)
まで三里余麓(フモト)のまへに瑞雲(ズイウン)坂をのぼり瑞雲寺(ズイウンジ)まで又より
小天龍川舟渡(フナワタシ)あり掛川を入て山々(ヤマヤマ)皆(ミナ)大木多し松杉の茂し
山尤高(モツトモタカシ)麓(フモト)より山に登(ノボル)る五十町唐銅の鳥居あり額(ガク)金明(キンメウ)
嶺(レイ)。山門に最勝閣(サイシヤウカク)本堂に大登山(ダイトウザン)と有堂ハ南面(ナンメン)本尊観(カンゼン)
音を安置(アンチ)す鎮守(チンジユ)南向権現の社あり寺ハ禅(ゼン)宗(シウ)秋葉寺。
と云是より三河国鳳来寺(ホウライジ)にゆく路(ミチ)也則(スナハチ)寺の後(ウシロ)の方坂(サカ)
を下る事五十町戸倉(トクラ)と云所まである山坂多し半里(ハンリ)ほどし
犀河(サイカハ)舟渡(フナワタシ)天龍(テンリウ)川の源(ミナモト)也此辺(コノヘン)総(スベ)て米なし芋稗(イモヒエ)を

食も海なくして塩乏し甚の深山にて猿猪多し
夫より石井へ一里然村へ二里此邊殊に山林幽巌人烟相寂
寞として物さびしき地也婦人ハ旅客乃荷物を負て賃を
取男子ハいつも海を見ず平地ニ人家の並立をしらす事
なし此熊村より一里半加宇連峠にいたる又行一里
半巣山村此方峨々轉と云峠あり遠州と三河の境
なり越或四十四曲坂をとり大野まて一里半此方殊ニ深山也
大野ハ市街商家多し夫より板敷川を渡川の底岩
如板故ニ名とすつく鳳来寺麓より五十町山にのぼる

行者越より又一町余登るに皆巌石を攀て絶頂に至る
遠州海遥に見えて山を連て波のおしくるとも見えて三四町山を
下て石階の上に権現の祠あり階下に薬師堂あり末社本
堂の後ろにあり左の方岩にそふて塔あり夫より石階をおる
事九町にて中半に十二坊天台真言二派あり学頭天台なり
松高院と云に醫王院の二坊も即下れば角屋町旅籠
多しここよりして瀧川へ出る渓の間を流る川にて舟わたし
ある銭亀村より瀧川にそひて新城へ二里富商多し
夫より野田へ二里十六町大木村へ三里豊川をわたりて小

奈高戸ヶ原家野ヶ原本野ヶ原とてそて杉原を過て峠
一里余漸御油佳邑へ出る

熊村

此辺農夫八舎々山の半に作り所一二軒宛山して作を作るといへとも猪猿多くして畑をあらし故に廻に垣をむすふ図のことし皆これか家ハ猪番小屋なり日暮りなりぬれハ此熊村の庄屋の宅に家守秋かけて猪追来とも夜日しいつとも救なし

鳳来寺乃方重山
かぎりなし見ゆる

勢州日永村ツンツク踊之圖
唱文句
ツンツンツンツクツク
堺ヶ濱で
田を植る

おはれの果て
富士乃山
酒よつれしが泉酒（イツミザケ）
みぢやうるに
はうちよし
馬でやろうには山坂よ
車でやられぬ道（ミチ）がなし
テテテツクく西の山から
あときりむしで行まする
しでまとまりひしさ
たまごにさして
チ切（チギリ）みさして
美顔（メヽヨキ）小女郎よそう
嬌（ツラ）しよソウソウウンと踊（オドリ）い
是山でゝ
ヱイトコく

四日市盆踊
おんど唄(ウタ)年々
文句
うる

四日市諏訪明神祭
見物近郷より出る
挑灯
夜々の山まつりに
男女参詣する

勢州四日市の驛より石薬師の間の宿日永村にて七
月十三日十四日十五日盆中ツヽツク踊とて小童或ハ十七八の女子
又廿歳ばかりのものに白きさらしにて手拭をほう冠りして
腰に扇をさしてそれ〳〵輪となり唱ふ此一村ニ而町
より此踊を出して一町つゝ唱文句ちがひぬ
七月十六日日永よりゆけば三里余菰野といふ所よりある土方
侯一萬石の領地之陣屋あり市中一二町夫より東北の方に
車十余町ほどして河原ありつゞく五六十間常に水なし両縁ハ
漲川源ハ三里を隔湯の山青瀧と名瀧の流なり

廿日湯山より行く曠野より二里餘一里ゆきて方一里程の原あり小笹おほし白真桔梗女郎花を以て秋花盛也自ら溪河を渡れば山中に入時砂山にして砂流て山骨を顕し大石道路を塞ぐ又行こと半里溪流を渉り岩石を越て一生石頭を踏て躍越え溪流甚深し又行こと四五町にして溪水に同じく躍越え左右悉く大山にして谷を高くそびえたる山を挟て坂に屋舎を作る十軒許其半は湯室也温泉は飯のごとし火を焚て湯となし浴する者多し此地嶮岨にして大樹なし五穀不生此辺土なし皆小石なり大石の破てなりたるもの如此

湯の山路溪河乃圖
湯の山全圖
冠が岳
湯原

此山中夏月ハ沴氣虫もなく不出
蚊もなし冬月ハ雪深くして
住ゐがたし此所より近江國日
野へ山越四里許也人家なし
谷流をくだる所の六瀬狼
鰷多しとぞ
七月廿六日廿七日四日市諏訪
明神の祭りに近郷の者
見物に出る山ととよめと

作又稀なる土なり此驛より京に屬す東方の風俗違し
婦人髪の風も等く京の流行の衣も此里より社に詣る婦女
頭に帽子を被る夏月ハ絽をもって製し冬月ハ綿をもってつくる
葉名より此邊家作宜しく候

勢州石薬師より四里
山中に入石大神と云
数丈に直立して
白石なり

石大神
より廿一
入屏風
岩なり

十八九町ハカリノ間
西岩絶壁白岩ニ
シテ松楓多シ秋ハ
紅葉シテ画ノ如シ

亭
神戸へ行路
高岡川
鈴鹿ヨリ落ル

八月二日日永村を發て神戸に至三日
に神戸を出て白子觀音堂伊勢参宮道也夫
より津に至る藤堂侯三十万石乃城下なり
比屋縦横に町續き富高を雲津川舟
渡此川伊賀山より流出る之夫より又川を
二瀬川なる此者松坂をゆく人家つゞき
富高多夫より行事四里小畑又新
茶屋なといふ处をなて宮川乃
舟渡川なれど山田人家建續繁昌

の地と外宮内宮の間古市中乃地殊に所倡家多し

六日二見ヶ浦乃方。山田を發して山中にいりゆく事半里許にして川あり塩合川とて舟にし移りて二見にいたるなれよりその浦邊をめくりてゆけり峠坂の礒より一村に入川あり舟にて渡る小山をこえて又渚邊に出る池の浦といふ所名島見えてそれより松山

にのくし志摩國鳥羽浦よ至る人家多く市街あり
是まて四里まて五十町一里あり此浦ヶ西國の方乃船を掛
關東の方へ渡るより日和山登ればs四方乃島々見え佳景也

池の浦之圖
飛島七ツ嶋
見ゆる東の方
あり

鳥羽
日より
山より
北の方
を望
島數
見ゆる
景よし

巻之一終

小石川町

豊後利貞

米經